

連載100回記念

直撃！小林学芸員



平成18年4月号から連載を開始し、8年と4カ月。今では広報紙の中でも人気のコーナーとなっている「読む水族館」。開始当初から担当している竹島水族館の小林龍二学芸員にお話を伺いました。

100回続いてどうですか？

100回も続いたんだな、と驚いています。回数よりも、初めの頃は怒られないように、原稿を落とさないように、という気持ちが強かったです。

「読む水族館」の話が来たときはどうでしたか？

入社して2年目くらいにこの話があり、それ以来ずっと書いています。毎日の仕事を書いていけば書くことはいくらでもあったし、水族館をたくさんの人に知ってもらいたいと思っていたので、その手段のひとつになるし、うれしかったです。自分からやりたいと言いました。

毎月書くのは大変じゃないですか？

ネタを何にしようと考えていたら締切過ぎちゃったことはあるけど、決まれば15分くらいで書いちゃいます。書いていいならいくらでも書けます。

ネタを探すことよりも、決められた文字数にまとめるのが難しかったです。文字数を増やしてほしいと自分からお願いしました。1ページ分書いちゃったことも。(文字数増は22年6月号から。1ページ書いたのは22年10月号)

ネタはどのように決めるんですか？

館内や町であったこととか、近所の方が飼いがわからないと言っていたこととか。親が決めることもあり。テレビでやってたからこれ書け」とか。漁師さんも「俺たちの

こと書け」と言ってきました。こういうことを書いてほしいというのがあれば教えてほしいです。書くときに心がけてることはありますか？

専門用語は使わないようにしたり、身近な魚の話を取り上げたりして図鑑みたいにならないようにしています。さらっと読んで「おもしろかったな」と思ってもらえるものにしたいです。論文みたいなのも書けるんですけど、でもそれじゃ面白くないですよ。

「読む水族館」だけでなく、本物の水族館ももちろん大人気。水族館のイメージが変わりましたね。

以前の水族館のイメージは「コンクリート造りで暗くて湿気た施設」という方が多かったです。市民の方でも「まだやってたの？」という人もいたくらいでした。

魚を上手に飼育することが一番の目的で、それは今でも大切なことですが、魚を見せるという感覚がありませんでした。

でも「これじゃいかん」と思い、それを変えたいと思っていました。